

# 志登遺跡群

第5次発掘調査報告

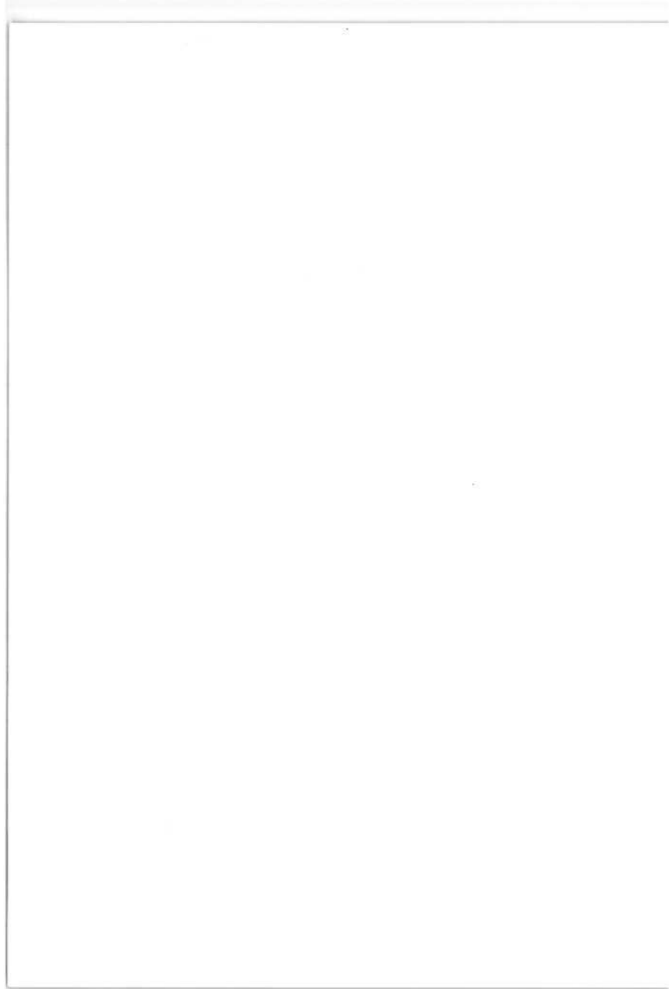
前原町文化財調査報告書

第18集

1985

前原町教育委員会





## 刊行にあたって

糸島平野のほぼ中央に位置する志登地区は、北に山塊がなだらかな起伏をなす志摩半島、南には佐賀平野と境界をなす雷山山系をのぞむ、風光明媚な田園地帯です。

当地区には私達の祖先が残した貴重な文化遺産が数多く地中に埋もれていることが以前から知られていましたが、昭和53年度から行なわれた県営泊地区ほ場整備事業によって、その一部が発掘調査による記録保存に頼らざるをえない事態となりました。本調査は57年度から始まり、すでに3年めを迎えています。

本書は昭和59年度に調査した成果をまとめたものです。今回までの一連の調査により、当地区の遺跡が時間的にも地域的にも広範にまたがる貴重な文化遺産であることが再確認されました。本書が文化財保護活動および学術研究の一助としてお役に立てば幸いです。

調査に際し、地元で協力して下さった方々をはじめ幾多の御配慮を給った関係機関のみなさまに心から感謝の意を表する次第です。

昭和60年3月30日

前原町教育委員会  
教育長 豊島禮蔵

## 例 言

1. 本書は、昭和59年度泊地区渠営ほ場整備事業の施行に伴い、前原町教育委員会が昭和59年10月4日から同月29日にかけて行なった埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 志登遺跡群において、文化財保護委員会によって昭和28年に行なわれた調査を第1次調査とし、当教育委員会によって昭和57年、58年に行なわれた調査をそれぞれ第2次、3次調査とする。
3. 昭和59年度に行なわれた調査については、志登325番地地点を第4次、志登343番地地点を第5次調査として報告する。
4. 本書に用いた地図は国土地理院発行の5万分の1地形図および前原町都市計画課保管図から製作した。
5. 遺構実測図及び遺構写真は主に岡部裕俊が行い、一部川村博の協力を得た。
6. 本書に掲載した須恵器実測図のヘラケズリ調整については、その終止線は実線で、ケズリに伴う稜線は一点鎖線を表示し、他の鈍い稜線は破線を表示した。
7. 本書の執筆、編集は岡部が行なった。

## 本文目次

	頁
I. 調査にいたる経過	1
II. 調査概要	3
III. 遺構と遺物	5
1. 第5次調査概要	5
2. 建物	6
(1) 竪穴式住居	6
S C 01—8, S C 02—8, S C 03—9, S C 04—9	
S C 05—9, S C 06—10, S C 07—10, S C 08—10	
S C 09—11, S C 10—11, S C 11—11, 小結—11	
(2) 掘立柱建物	13
S B 01—13, S B 02—14, S B 03—15, S B 04—15	
S B 05—16, S B 06—16, S B 07—17, S B 08—17	
S B 09—18, S B 10—18, S B 11—18	
3. 井戸	19
S E 01—19, S E 02—22, S E 03—24, 小結—26	
4. 土壌	27
S K 01—27, S K 02—30, S K 03—30, S K 04—31	
5. その他の遺構	34
(1) 柵列	34
S A 01—34, S A 02—34, S A 03—35, S A 04—35	
S A 05—35	
(2) 柱穴群	35
6. まとめ	35
付載 調査地区南用水跡出土の遺物	36

## 挿図目次

第1図 遺跡の立地と周辺の地理的環境 (1/50,000)	2
第2図 遺跡の範囲と調査地点 (1/5,000)	4
第3図 竪穴式住居配置図 (1/150)	7
第4図 S C 01竪穴式住居実測図 (1/50)	8

	頁
第5図 S C 06竪穴式住居実測図 (1/50) .....	8
第6図 S C 07竪穴式住居実測図 (1/50) .....	9
第7図 S C 08竪穴式住居実測図 (1/50) .....	10
第8図 S C 09竪穴式住居実測図 (1/50) .....	11
第9図 掘立柱建物配置図 (1/150) .....	12
第10図 S B 01掘立柱建物実測図 (1/50) .....	13
第11図 S B 03掘立柱建物実測図 (1/50) .....	14
第12図 S B 04掘立柱建物実測図 (1/50) .....	15
第13図 S B 05掘立柱建物実測図 (1/50) .....	17
第14図 S B 06掘立柱建物実測図 (1/50) .....	17
第15図 S B 07掘立柱建物実測図 (1/50) .....	18
第16図 S B 09掘立柱建物実測図 (1/50) .....	18
第17図 S E 01井戸実測図 (1/25) .....	19
第18図 S E 01井戸出土土器実測図 (1/4) .....	20
第19図 S E 02井戸実測図 (1/25) .....	23
第20図 S E 03井戸実測図 (1/25) .....	23
第21図 S E 02井戸出土土器実測図 (1/2) .....	24
第22図 S E 03井戸出土土器実測図 (1/4) .....	24
第23図 S E 03井戸出土土器実測図 (1/2) .....	26
第24図 井戸底面到達レベル (1/100) .....	26
第25図 S K 01土壌実測図 (1/20) .....	27
第26図 S K 01土壌出土土器実測図 (1/4) .....	28
第27図 S K 01土壌出土陶質土器実測図 (1/2) .....	29
第28図 S K 03土壌実測図 (1/20) .....	30
第29図 S K 03土壌出土土器実測図 (1/4) .....	30
第30図 S K 04土壌実測図 (1/20) .....	32
第31図 S K 04土壌出土土器実測図 (1/4) .....	33
第32図 調査区南側南北用水路出土遺物 (1/4) .....	36

## 表 目 次

	頁
表1 竪穴式住居柱穴掘削レベル .....	6

## 写真目次

	頁
写真1 発掘調査風景	3

## 図版目次

図版1	a. 調査地点全景（西から） b. 調査地点全景（東から）
図版2	a. 東側調査区近景（北から） b. 中央調査区近景（北から）
図版3	a. 竪穴式住居の切り合い① b. 竪穴式住居の切り合い②
図版4	a. S B01, 10, 11掘立柱建物の切り合い b. S B01掘立柱建物近景
図版5	a. S B02掘立柱建物 b. S B03掘立柱建物
図版6	a. S B06掘立柱建物 b. S B06掘立柱建物とS A01, 02櫓列の配置
図版7	a. S B08掘立柱建物 b. S B09掘立柱建物
図版8	a. S B02, 03, 07掘立柱建物とS A01櫓列の配置 b. S B04, 05, 08掘立柱建物の切り合い
図版9	a. S E01井戸と出土した完形甕 b. 完掘後のS E01井戸
図版10	a. S E02井戸 b. S E03井戸
図版11	a. S K01土壌 b. S K04土壌
図版12	a. S K04土壌裏出土状況 b. S K04土壌瓶出土状況
図版13	遺物写真 ①
図版14	遺物写真 ②



## I. 調査にいたる経過

志登遺跡群は、福岡県糸島郡前原町大字志登他に所在する遺跡群である。

この遺跡群の発掘調査に至るまでの経過については、次のとおりである。

志登地区は、以前から周知の埋蔵文化財包蔵地とされていたが、昭和53年度頃から計画が進められてきた泊地区県営ほ場整備事業によって、その一部を消失する可能性が生じてきた。そのため福岡県教育委員会文化課、福岡県福岡農林事務所、前原町土地改良区の三者によって、整備対象地区の埋蔵文化財の存否ならびに包蔵地の範囲についての調査、協議が行なわれ、ほ場整備事業は埋蔵文化財の包蔵されない地域から実施されることとなった。昭和57年度からはほ場整備事業施行範囲内に埋蔵文化財包蔵地がかかるようになり、事前に調査する必要性が生じてきたため、前原町教育委員会が調査主体となり、前三者とも協議を重ねながら、試掘、発掘調査を実施してきた。今年度はその3年次にあたり、地形上、文化財包蔵地の削平を免れられない2地点について、発掘調査を実施した。本報告書において報告する第5次調査地点での発掘調査面積は約500㎡である。調査期間は昭和59年10月4日から同月29日までであった。

第5次調査における発掘調査組織は以下のとおりである。

**調査主体** 前原町教育委員会

<b>総括</b>	教育長	豊島 禮藏
	社会教育課長	中原 直國
<b>庶務</b>	同 文化係長	吉村 耕治
	同 社会教育係長	徳重 認
	同 主事	久保 静代
<b>調査</b>	同 文化係主事	川村 博
	同	林 覚
	同 嘱託	岡部 裕俊 (現総務課 主事補)

### 調査・整理作業

石井扶美子 (前原町教育委員会発掘調査補助員) 中峰幸枝 中村照子 小柳房子 笠  
ふさ子 竹内孝子 中原レイ子 米山八重子 小畑川妙子 東可まち子 木村シゲノ  
橋本キヨ子 中田智暁 渡辺重幸 原野アサ子 青木輝代 平山富士子 柏田瞭子 岡  
田りつ子 野村松江 小金丸利江 藤森啓子

なお、調査に伴い、次の関係諸機関の方々には、多くの御協力、御助力をいただきました。深く感謝いたします。

福岡県福岡農林事務所 (所長 半田義輔) 前原町土地改良区 (所長 中村敬次郎)  
泊地区県営ほ場整備事業推進協議会 (会長 田中國雄)



- 1. 志登遺跡群
- 2. 曾根遺跡群
- 3. 三雲 井原遺跡群
- 4. 飯原 蛭嶋里遺跡群
- 5. 浦志遺跡群

第1図 遺跡の立地と周辺の地理的環境 (1/50,000)

## II. 調査概要

志登遺跡群では、過去4次にわたる発掘調査が行なわれ、その成果が報告されているので簡単にその推移をたどってみる。

### 第1次調査

昭和28年12月に文化財保護委員会によって行なわれた大字志登字坂本に残る支石墓を主とした発掘調査である。調査期間は約11日間を費やし、その結果弥生時代の支石墓10基、甕棺墓8基、平安時代溝1条等が検出された。支石墓はうち4基に内部主体の調査が行なわれ、柳葉形磨製石鏃等の出土をみ、北部九州における支石墓研究の貴重な1ページを飾る調査となった。

当調査において、弥生時代墓地の調査と合わせて、包含層からの弥生土器の出土、平安～鎌倉時代にわたる青磁、白磁、土師器、須恵器、瓦等の出土が報告されており、現在にいたるまで当地域の歴史を考察するうえでの基礎資料として活用されている。

### 第2次調査

昭和57年11月初旬から12月中旬にかけて前原町教育委員会を調査主体とする泊地区泉宮ほ場整備事業に伴う調査である。調査地は第1次調査地の北東約700m、式内社である志登神社の北東部に設定された。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての住居跡12棟、土坑4基、溝1条が出土している。

### 第3次調査

第2次調査地点の南東、約600mに昭和58年9月下旬から11月下旬にかけて同町教育委員会が行った。前年度に引き続く泊地区泉宮ほ場整備にともなうもので調査面積は約2000㎡。

調査区より弥生時代から一部歴史時代にかかる溝状遺構3条、竪穴式住居、掘立柱建物、柱穴群等が検出され、多量の土器とともに溝埋土中から、弥生後期の銅鏃が出土している。

### 第4次調査

第2次調査と第3次調査地点のほぼ中間に位置するもので、泊地区泉宮ほ場整備にともなう発掘調査の3年次めにあたる。調査は昭和59年7月下旬から同年10月下旬にかけて行なわれた。

調査区内からは、平安時代の井戸5基、掘立柱建物、棟住居跡、多数の柱穴群が調査され、遺構にともなって古式土師器、勾玉、管玉、土師器、須恵器、瓦器、木製品等が出土している。

註

- (1) 文化財保護委員会「志登支石墓群」理論文化財調査報告4 1956
- (2) 川村博 編「昭和57年度理論文化財発掘調査概要」前原町教育委員会 1983
- (3) 富松伸夫、中村祥平 編「志登遺跡群-B地点」前原町教育委員会 1984
- (4) 富松伸夫、林 愛が調査にあたり、今年度報告書が刊行される予定である。



写真1 発掘調査風景(59年10月)



第2図 遺跡の範囲と調査地点 (1/5,000)

### Ⅲ. 遺構と遺物

#### 1. 第5次調査概要

前述のような調査経過を経て、第5次調査は昭和59年10月4日より同月29日にかけて実施された。当調査区は第3次調査地点の西方約130mに立地し、東に雷山山系に源を榮し北流する雷山川を挟んでさらに西には支登支石墓群をのぞむ。またそのさらに西1kmには朝鮮式小銅鐸を出土した浦志遺跡A地点があり、古くから当地周縁部が言わゆる「開けた土地」であったことを窺わせる。

調査区の北側500mには糸島水道の存在が推定されており、第3次調査、第4次調査地点とに囲まれた地点は南北に狭長な谷状地形を有しているため、調査区は若干北側に低く傾き、また東側にむけて序々に低まる傾向にある。

調査区の基本層位は、上層に田畑耕作土、中層に耕作土床土をおいてはいるものの、その下面にはすぐ遺構面が姿をみせた。遺構面までの深さは30cm程であった。後述するように、調査区内の柱穴の残存状況、また調査区西を南北に走る道路肩との比高差からみて、この地が田畑造成時にかなり深く整地、削平作業が行なわれたため旧地形がかなり変容し、遺構面、包含層等をも削平を受けたようであり、それを裏付けるように調査区周縁の水田には多くの土器細片が散布していた。

調査区内で検出された遺構は、竪穴式住居、獨立柱建物、井戸、土城、欄列、柱穴群等であった。該当時期は、古墳時代前期と奈良時代であり、調査開始当初の子息に反し、弥生時代、平安、鎌倉時代の遺構は検出されなかった。

以下、それぞれの遺構について述べてゆく。

#### 註

- (1) 富松幹夫 編「浦志遺跡A地点」前原町教育委員会 1984
- (2) 調査前の周辺地域における事前の遺物表採を行った折、弥生時代中期～後期の土器片・土師器残片が出土している。

## 2. 建物

調査区内からは多数の柱穴が検出されたが、埋土出土遺物および柱穴平面プラン等からの考察により竪穴式住居と、掘立柱建物の2つの建物の存在が考えられる。

### (1)竪穴式住居

前記の如く残存柱穴の深さがいずれも浅いこと、東側道路肩と調査区レベルとの比高差が50cm近くもある事などから(表1参照)、近世以後の水田開発のために旧地形がかなり改変されていることが推測された。また調査区内から不整形、長方形プランをもつ建物跡が多く見出しされる事から、竪穴住居が床面下レベルまで削平されたものとして報告する。

調査した竪穴住居は計11棟で調査区南西部に集中、重複している。住居のプランについては床面が残っていないため詳しくは述べられないが、柱間間隔がその規模に比例していると考えれば、大、中、小の三タイプに分類できる。

- A. 柱間の一辺が200cm内外を計る小形のもの。SC01を指標とする。
- B. 柱間の一辺が270cm内外を計る中形のもの。SC04を指標とする。
- C. 柱間の一辺が350cm内外を計る大形のもの。SC03を指標とする。

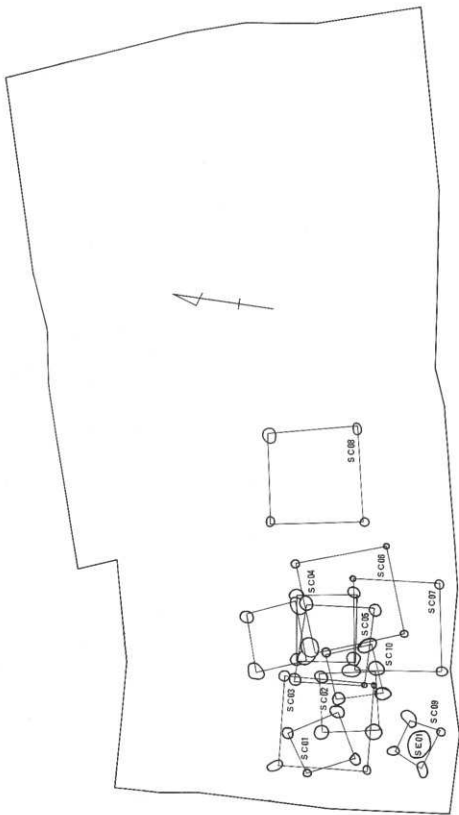
埋土出土器を観察すると、小形のA類から大形のC類への推移がたどれるが、詳細については今後の検討が必要となろう。建物の配置、規模等から考えて同時期に建てられた建物は1ないし2棟であったと考えられる。

調査区西側はこれら居住地を含む低位舌状台地の最高所を占めており、住居はこれら台地上面にむけて広く分布するものであろう。調査区はこれら住居群を含む集落の東端にあたるものとする。

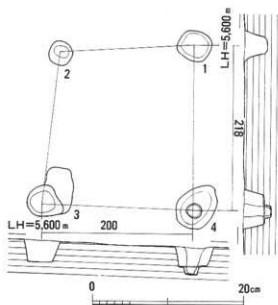
以下、個々の住居について概説する。

竪穴 番号	主柱の底面レベル							
	北東柱穴		北西柱穴		南西柱穴		南東柱穴	
	上場	下場	上場	下場	上場	下場	上場	下場
01	9.6	103+α	9.8	1.3.9	9.7	1.2.6	9.6	1.3.4
02	10.2	1.1.1	9.9	1.1.3	9.3	1.1.0	9.5	1.2.5
03	9.7	1.1.5	9.4	122(109.3)	9.7	1.1.2	9.7	1.1.2
04	10.1	1.0.8	9.9	1.1.2	9.8	1.1.2	1.0.2	1.1.4
05	10.1	137(1137)	10.1	1.3.4	10.2	1.1.4	100.7	1.1.3
06	10.1	1.1.6	9.9	126(108.4)	9.6	1.1.9	9.9	1.1.3
07	10.2	1.1.6	9.7	1.1.6	9.5	1.1.8	9.8	1.1.4
08	9.9	123(115)	10.1	1.1.6	10.0	1.1.9	9.9	115(112)
09	9.6	1.1.7	9.7	1.1.7	9.5	127(120)	9.5	119.7
10	10.4	1.2.4	9.8	1.1.4	9.5	1.1.1	9.7	1.0.8
11	10.1	1.2.0	9.8	1.0.8	9.8	1.0.9	9.9	1.1.3

表1 竪穴式住居柱穴レベル(cm)  
(数字は標高6,600mからのマイナスレベルとして表示した)



第3圖 整穴式住居配設圖 (1/150)



第4図 SC01竪穴式住居実測図(1/50)

#### 出土土器

弥生後期の土器片を中心とし、一部山陰系二重口縁壺片を含む終末期の土器片も混じる。

#### SC01竪穴式住居

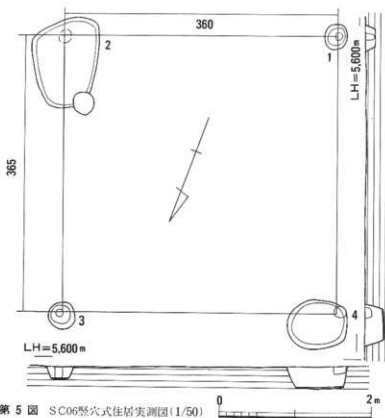
SC03内で主軸を $N-30^{\circ}-W$ に向ける方形プランの柱間をとる住居で、柱穴4には明瞭な柱痕跡を残す。柱穴からいずれも土器片が出土している。A類の住居跡である。

#### 出土土器

柱穴4より弥生後期のカメラ縁が出土しているが、小片であるため実測にはいかなかった。

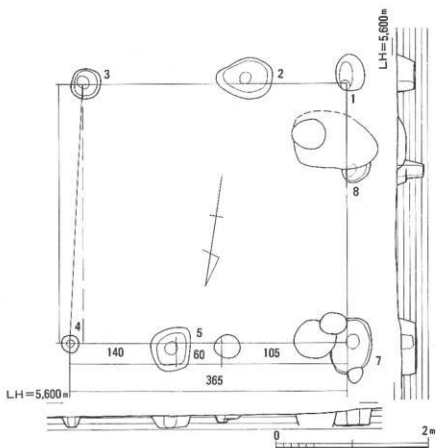
#### SC02竪穴式住居

SC01, SC10と東西で切り合う住居で、主軸を $N-10^{\circ}-W$ にとる方形規格の柱穴を配し、その深さも一様である。柱穴2, 3, 4から土器細片が出土した。A類に属する。



第5図 SC06竪穴式住居実測図(1/50)





第6図 SC07竪穴式住居実測図 (1/50)

#### SC03竪穴式住居

S C02, S B01等と切り合う方形規格の柱間をもつ竪穴式住居で主軸をN-5.5°-Wにとる。柱穴の深さはほぼ同じである。各々柱穴埋土から土器片が出土している。C類に属す。

#### 出土土器

古式土師器裏口縁片等小片が出土しているが、実測にはいならなかった。

#### SC04竪穴式住居

S C11と切り合いS C05と重複する長方形規格の住居である。N-90°-Wに主軸をもつ柱穴は浅い。柱痕跡が明瞭に残る。柱穴1, 4より土器片が出土した。A類の範疇に含まれる。

#### 出土遺物

土器はいずれも細片であるが、大半が裏片であり内面調整にハケ痕跡がみられることから弥生後期の範疇に含めて大過ないものと思われる。

#### SC05竪穴式住居

S C06, 07等と切り合う方形規格の柱間を持つ住居で、N-4°-Wに主軸を向ける。北側柱穴は深めに掘り込まれている。柱穴埋土より土器片が出土した。B類に属する住居である。

### 出土遺物

弥生終末のタタキを持つカメ片、壺片が出土しているが実測にはいならなかった。

### SC06竪穴式住居（第5図）

主軸をN-21°-WにとるC類の竪穴式住居で方形プランの柱間間隔をとる。柱穴の深さには若干のばらつきがみられるが柱痕跡をよく残している。柱痕跡の径が10cm弱と小さく、他の建物を想定する必要もあろう。埋土からの土器の出土はなかった。

### SC07竪穴式住居（第6図）

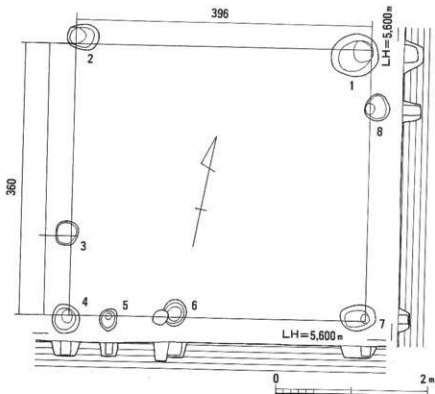
SC06の南西に位置しSC05と切り合う住居で柱穴は方形プランをとり、東西柱間に間柱をもつ。柱穴は浅く柱痕跡を良く残している。N-11°-Wに主軸をとり北東柱が若干東に張り出す。柱穴7等から土器片が出土している。C類の住居である。

### 出土土器

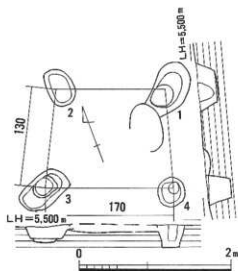
古式土師器カメロ縁片が出土しているが小片のため実測は行なわなかった。

### SC08竪穴式住居（第7図）

SC06の東に位置する主軸をN-11°-Wに向ける主柱が正方形プランをなす住居で明瞭な切り合いを持たない。柱穴の深さは柱痕跡の到達レベルを考慮するとほぼ同レベルを示していると言える。柱穴埋土からの土器の出土はない。C類に含まれる住居である。



第7図 SC08竪穴式住居実測図(1/50)



第8図 SC09竪穴式住居実測図(1/50)も小片のため実測できなかった。

#### SC10竪穴式住居

SC03, SC07竪穴式住居の間に立地するA類の竪穴住居である。主柱は方形規格をなし主軸はN-21°-Wに傾向する。東西柱間190cm, 南北柱間は180cmである。柱穴底面レベルは一定していない。柱穴埋土中より土器片が出土している。

#### 出土土器

北東柱穴を除く三柱穴から土器が出土した。弥生後期の土器片と思われるがいずれも小片であり量的にも乏しいため時期の確定にはいたらなかった。

#### SC11竪穴式住居

SC04の北側に、N-25°-Wに主軸を傾ける住居で南西柱穴がSC04, SC06と切り合いをもっている。主柱は東西側に長い長方形プランを呈している。柱穴の下場レベルには多少のばらつきがみられ、東西柱間230cm, 南北柱間200cmを測る。北東, 南東, 北西柱穴には明瞭な柱底跡が観察された。いずれの柱穴からも土器片が出土しているがどれも小片であった。

#### 出土土器

柱穴埋土から出土した土器はいずれも小片であったため実測はむずかしかったが、弥生後期の土器が含まれていたことを付加しておく。

#### 小結

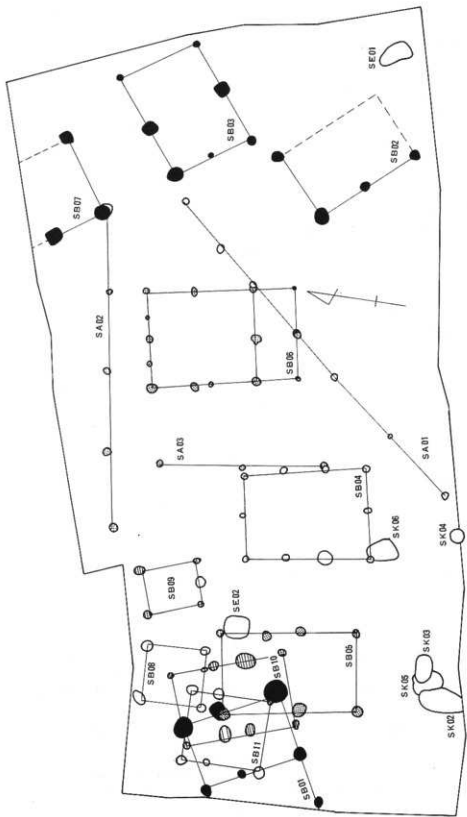
現況から復元できた竪穴式住居はいずれも、主柱が方形あるいは長方形プラン等を呈す例に限られるが、既報告の住居例においては不整形あるいは、2, 5本柱の住居例等もあり、機能が復元できなかった柱穴群の問題も含め今後検討してゆく課題となろう。この地で竪穴式住居の當まれたのは古墳時代前期中葉を下限とするようである。

#### SC09竪穴式住居(第8図)

調査区南西隅にみえる。主柱穴が南側に広がる等脚台形状を示す建物である。柱穴の底面レベルは柱底跡を考慮すればほぼ同レベルであると言える。主柱によって画された台形規格の中心にSE01井戸が位置している。ここでは一応竪穴式住居として報告するが、井戸を保護する覆屋としての掘立柱建物としての可能性を残している。柱穴埋土から出土した土器片からは井戸との関係を示すことはできなかった。

#### 出土土器

柱穴1, 4から土器片が出土しているが、いずれ



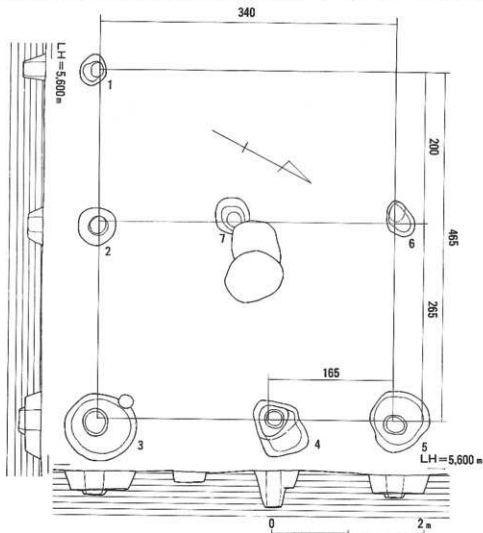
第9圖 獨立柱總物配置圖(1/150)

## (2) 掘立柱建物

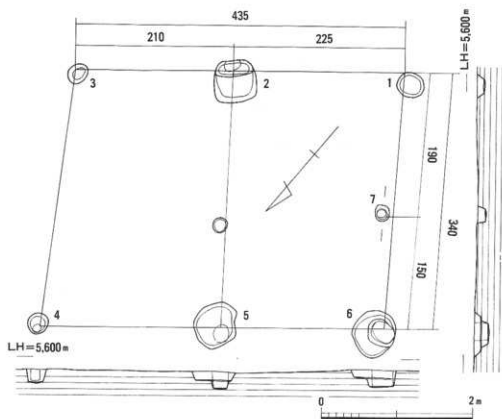
当調査区より出土した掘立柱建物は合計11棟であり、およそ古墳時代前期の建物(SB01, 02, 03)と奈良時代後半期の建物(SB04, 05, 06, 11)に分けられる。前者は主軸を北から大きく傾けるのを特色とし、後者は主軸を北、あるいはそれに近い方向に向けて建てられている。後者において、その遺構の配置状況等から同時期に建てていたと考えられるのは、SB05, 06である。特にSB06においては、建物の北と西に垣根状の柵列を設けており、他の住居と居住空間を画していることは興味をひかれる。以下個々の建物について概説しておく。

### S B01掘立柱建物 (第10図, 図版4b)

調査区西端に位置し東半部を調査区外に残す。主軸を $N-60^{\circ}-E$ にとる2間 $\times$ 3間 $+\alpha$ の建



第10図 SB01掘立式柱建物実測区(1/50)



第 11 図 SB03 掘立柱建物実測図 (1/50)

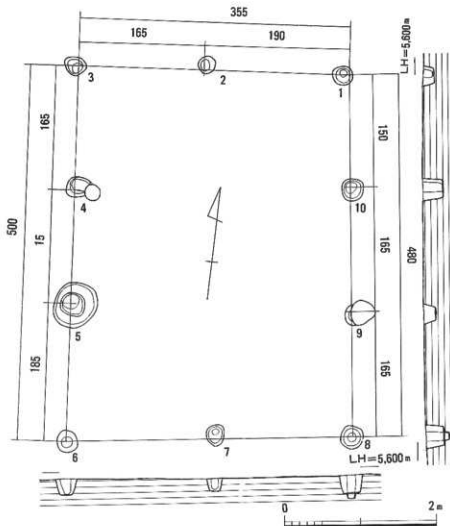
物で床柱をもつ。東側の 2 本の主柱は掘り方も大きく深い。柱痕跡は良く残っており径はいずれも 25cm 内外と大きい。この 2 本の主柱を含め間柱、床柱とも掘り方は深い。柱間寸法はやや規格性に乏しい。柱穴埋土から多くの土器片が出土している。時期は古墳時代前期中葉を下限とするものである。

#### 出土土器

柱穴の埋土それぞれから土器片が出土しており弥生後期土器、古式土師器カメコ縁、胴部等が出土している。実測にはたえないもののそれ以後の土器を含まず土器の磨滅も少いことから同時期の建物である可能性が高い。

#### SB02 掘立柱建物 (図版 5 a)

調査区東南部、SE03 東側に位置する掘立柱建物で、主軸方位は  $N-43^{\circ}-W$  を向ける。建物東の柱穴は削平を受けたためか検出されていない。平面プランは 1 間  $\times$  2 間をなし柱間は東西 300cm、南北 435cm を計り間柱は南から 195cm に掘り込まれている。柱穴の深さは浅い。埋土からの出土土器はいずれも小片であるため時期は決めかねる。



第12図 SB04掘立柱建物実測図(1/50)

#### 出土土器

柱穴から出土した土器には古式土師器が含まれるが小片であり、かつ少量であるため実測にはいたらなかった。

#### SB03掘立柱建物(第11図5b)

SB02の北に長軸をN-50°-Wに向けて設けられた建物である。柱間は定まっておらず平面プランも平行四辺形状に傾いている。現状の柱穴は浅く径も一定していない。時期は不明。

#### 出土土器

各々柱穴から少量の土器片を出土しており土師器片を含んでいるかいずれも小片であった。

#### SB04(第12図)

調査区中央に位置し  
S A03と切り合っている。  
長軸はN-8°-W  
をさす、2間×3間の  
プランをもつ。柱痕跡  
は明瞭に残っている。  
時代は奈良時代後半期  
でおさえられよう。

#### 出土土器

柱穴1、4、9から  
土器が出土しており、  
土師器、須恵器杯蓋片  
が含まれる。

#### S B05掘立柱建物

(第13図)

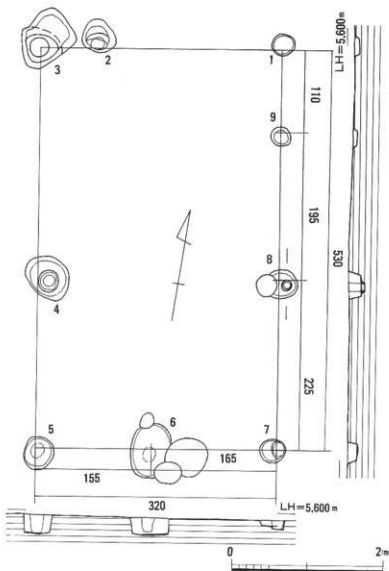
調査区西に長軸をN  
-9°-Wに向けて建て  
られている。平面プラン  
は2間×3間を呈し  
ているが柱間の寸法は  
一様ではなく柱穴の深  
さ・径にもばらつきが  
見られる。柱穴埋土か  
ら出土した土器は少量  
であり、明確な時期は  
導き出せなかった。

#### 出土土器

柱穴8、9より古土師器甕、椀片、須恵器杯身片等が出土している。

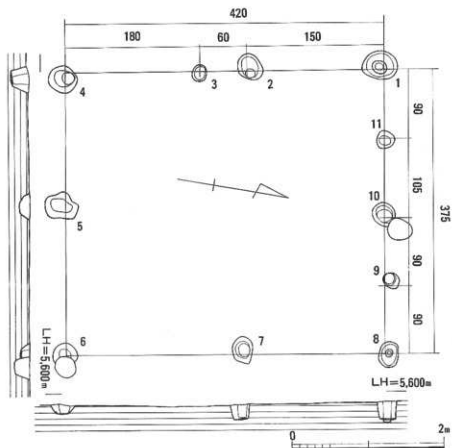
#### S B06掘立柱建物 (第14図, 図版6a, b)

S B04の北東にS A01と切り合って建てられている。主軸はN-10°-WでS B4、5同様は  
は真北を向く。平面は2間×2間の長方形プランを呈している。柱穴には明瞭な柱痕跡を残した  
ものが多くその径は近似しているが、深さは一様ではない。建物北側では間柱を三本掘り込  
んでいる建物の北と西にそれぞれ主軸に俗った柵列S A02、S A03があり、いずれも当建物に



第13図 S B05掘立柱建物実測図(1/50)





第14図 SB06掘立柱建物実測図(1/50)

併った遺構と考えられる。時期は奈良時代後半に位置づけられる。

#### 出土土器

柱穴3、4、6、10等から須恵器杯蓋、土師器襷片等が出土しているが実測にはいたらなかった。

#### SB07掘立柱建物(第15図)

調査区北東に調査区外にかかる建物で主軸をN-34°-Eに向ける。現況では1間×1間の東西に長いプランをみせるが北西へ伸びる可能性を有す。

#### 出土土器

各柱穴より土師器片を含む土器片が少量出土しているが時期を決定するまでにはいたらなかった。

#### SB08掘立柱建物(図版7a)

SB05の北側に位置しSB10と切り合う主軸をN-3°-Wにもつ方形プランの主柱を建てた建

物である。柱間の寸法は240cm×240cm。  
 時期は奈良時代に属する。

#### 出土土遣

柱穴からは多くの土師器片、須恵器片  
 が出土し脚付盤片等を含む。

#### SB09掘立柱建物 (第16図, 図版7b)

SB08の西に位置する長軸をN-17°-  
 Wに向ける1間×1間の長方形プランの  
 建物である。南側に間柱はいる。奈良  
 時代のものである。

#### 出土土器

柱穴2, 3, 4より土師器, 須恵器杯  
 身片等が出土している。

#### SB10掘立柱建物 (図版4a)

SB05, 08, 11と切り合う1間×3間  
 の建物で主軸をN-20°-Wに向ける。南  
 北柱間寸法にはばらつきがみられ, 柱穴  
 の径, 深さも一様ではない。時期は不明。

#### 出土土器

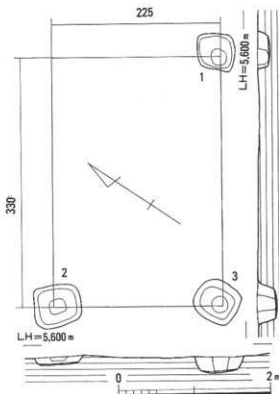
柱穴からは土師器細片が出土しているが時  
 期を決定するにはいたらなかった。

#### SB11掘立柱建物 (図版4b)

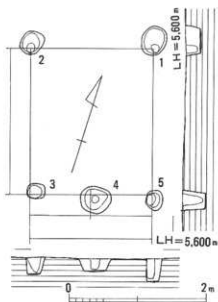
SB05と北西部で切り合う正方形プランの  
 建物で, 主軸をN-1°-Eにとりほぼ真北を  
 向く。柱穴は径, 深さともに一様ではない。  
 奈良時代の建物である。

#### 出土土器

柱穴からは須恵器片, 布目瓦痕をもつ土師  
 器裂片を出土した。



第15図 SB07掘立柱建物実測図(1/50)



第16図 SB09掘立柱建物実測図(1/50)

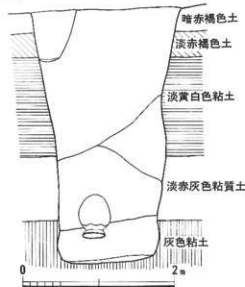
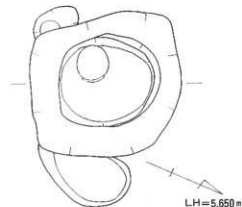
### 3. 井戸

調査区より出土した井戸は計三基（SE01～03）を数える。SE03を除く2基の井戸はいずれも調査区西側の柱穴群の集中地区中に位置しており、柱穴を伴う掘立柱建物、あるいは竪穴住居との密接は関係が推測される。いずれも掘り抜きの井戸であるが、SE01には井戸の上部には掘立柱の覆屋をもつ可能性があり注目される。

以下個々の井戸について説明を加えてゆく。

#### SE01（第17図 図版9a, b）

本井戸は調査区西南部端より検出された。現地表では東西98cm、南北95cmの方角プランを呈し主軸はN-25°-Wをとる。東西に各1個の既掘の柱穴を切って掘り抜かれており底に向かって下すはまりになる。地表下60cmに明瞭な段を有しながら不整形形を呈す底面に達し、最深部の深さは現地地表下167cmを計る。



第17図 SE01井戸実測図（1/25）

の深さは現地地表下167cmを計る。

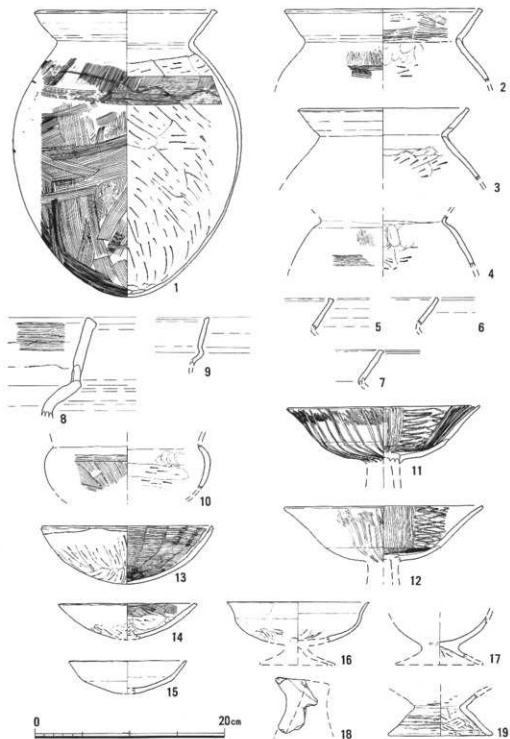
井戸壁の層位は上層から暗赤褐色土、淡赤褐色土（マンガンをコアとする卵状の白色団塊を含む軽石質火山灰であり、鳥柄ろーム層であると考えられる）。淡黄白色粘土（八女粘土層と考える）。淡赤灰色粘質土、灰色粘土と続く。井戸壁は強固で、残存状態は良好であった。

湧水は淡黄白色粘土と淡赤灰色粘土との層間、灰色粘土層中からみられ、本井戸調査時においても前記2ヵ所に若干のオーバーハングが観察されている。掘削当時の湧水層も現況に近かったものと推測される。埋土の層位は、大きく4層に分けられ、いずれもレンズ状の堆積をなしていた。上層より暗茶褐色土（上層）黒灰色粘質土（中層）黒灰色粘土（下層）淡黒灰色粘土（最下層）と続き底面より上方へ30cmの下層埋土から完形の甕がうつ伏せの状態出土した。

土器等から、当井戸が使用、埋没した時期は古墳時代前期中葉を下らないものと考えられる。

#### 出土遺物（第18図 図版B・1～8）

井戸埋土より出土した土器は完形のカメを除いて大半は破片であり、量さほど多くない。このことは井戸の掘削から埋没まで要した時間幅と無



第 18 圖 SE01井戸出土土器実測図(1/4)

関係ではないと思われる。以下個々の土器について述べてゆく。

1～7は甕である。1は下層から出土した。口縁部の一部が欠け胴部は縦に亀裂がはしる状態で出土したが、最下層より、欠け残り口縁片が出土したため完形に復元された。口唇部は平端面をもち肥厚して外方に鋭い稜をつまみ出し、口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。胴部は中位よりやや上方に最大径をもち肩がやや張った短楕円形状を呈す。口縁部は内外面ともヨコナデで仕上げられており胴部外面はハケ、内面は上方へのヘラケズリで仕上げを行っている。肩部はヨコハケを施した後に時計方向に一条のヘラ描波状沈線文をめぐらしている。いずれも丁寧な調整であり、胎土も白色小破粒を混えた精良な粘土を使用している。外面は淡黄褐色、内面では淡黄褐色を呈す。焼成も良好である。

2は口唇部の肥厚が1ほど顕著でなく口縁部の開きが大きい。胴部は肩が張るものと思われる。口縁部は外面ヨコナデ内面はヨコハケ胴部外面はタテハケで仕上げ肩部はヨコハケを施す。内面にはナメ方向のヘラ削りを施しているが上端部には指押痕が残る。胎土は白色砂粒を多く含む、色調は淡黄灰色をなす。焼成は良い。

3は口唇部のつくりが甘く平端面は若干丸みをおびる。調整は器表の剥落が著しく詳細に仕上げられた胴部外面にはヨコハケの痕跡を残し内面は右上がりのヘラケズリがみられる。胎土には白色ないし白色透明砂粒を多く含む、外面は暗灰白色、内面は淡赤褐色を呈す。焼成は良い。

4は胴上半部のみである。前3例に比して胴肩部の張りがみられず直線的に胴部最大径に至る。外面にはタテハケを施し上半部に一部ヨコハケを残す。内面は胴上部に指押痕を残しその下方は横方向へのヘラケズリを行なっている。胎土には白色透明砂粒を多く含むがおおむね良い、色調は赤褐色をなす。焼成は良好である。

5、6、7は口縁片である。5は口唇部が内方へ甘くつまみ出されており、口縁部は直線的に伸びる。胎土は精良で、淡黄灰色である。焼成は堅緻である。6は口唇部が甘い平端面をなすのみで7は外方へ鋭くつまみ出されている。いずれも、内多面ともヨコナデ調整を施しており胎土には白色小砂粒を多く含む。6は淡赤褐色、7は暗褐色である。

8、9は複合口縁壺の口縁片である。いずれも残存率が悪く口径を復元するにはいたらぬ。8は大形で、口唇部は凹みぎみの平端面をもち外方へふくらみを有す。頸部部は丸みをもっており頸部は短く胴部に接合する。器壁は厚い。外面はヨコナデ、内面口縁部には粗いヨコハケ、その下方にはヨコナデがみられる。胎土は粗く白色砂粒、黒色砂粒を多く含む暗茶褐色を呈す。焼成は良い。9は、中形壺の口縁である。8同様口縁部は内傾する平端面をもち頸部屈曲部は丸みをもつ。器壁は薄い。胎土には白色砂粒を多く含む淡灰白色を呈す。焼成も良い。10は直口壺胴部である。上半部に最大径をもつ肩が張った扁半球形をなす外開きの口頸部が接合する。外面はタテハケを施した後肩部にヨコハケ、頸部との接合部付近にはヨコナデがみられ、内面はヨコ方向のヘラケズリ、頸部下には指押痕が残る。胎土には白色砂粒を多く含む外

面は淡灰褐色、内面は明赤褐色である。焼成は良い。

11, 12は高杯杯部である。底部から外反する口縁部への屈曲はいずれもなだらかで、口縁の長さが底部の長さを上まわる。器厚はいずれも厚手であるが、12のほうが若干薄手で、口縁部の外反が11に比べて大きい。脚部との接合は脚頭部横からの接合である。外面の調整はいずれも口縁部下にナメハケを残した上から、杯底部から口縁部に向けてのタテ方向のヘラ描の研磨を加えており、内面は底部と口縁部の2段に分けたタテのヘラ研磨を施し一部タテ方向の波状研磨により省略を行っている。いずれも白色砂粒、黒雲母片を少量含む良質な粘土で11は淡橙灰色をなし、12は淡赤褐色を示す。いずれの焼成も良い。

13, 14, 15は椀である。13, 14はいずれもゆるやかな弧状をなし端部は外形するシャープな凹みを持つ平端面となす、ともに外底部にはヘラケズリを、上半部にはヨコナデを施しているが、13が内面をヨコハケのみで仕上げているのに対し、14は内底部にヨコ方向のケズリを加え器厚を薄く仕上げている。15は底部と体部の境に明瞭な稜を有し、外底部若干肥厚するため短脚付椀の可能性をもつ。白色砂粒を含む粗い胎土の土器で器表は剥落しているが本体は淡赤褐色をなすものである。焼成は良いが軟質である。

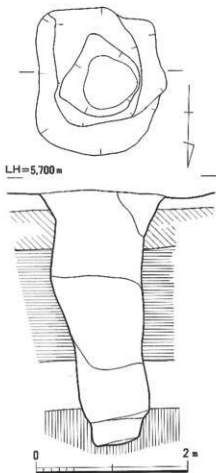
16は脚付椀の杯部である扁平な弧状をなす体部から外反する縁部へなだらかに移行するもので内外面とも体部と口縁部の境に甘い稜を有す。外底部には中心より放射状のケズリがみられ上半部にはヨコナデで整形されており、内底部にはヨコハケ上半部にはヨコナデがみられる。胎土には精良な粘土を使用し淡赤褐色を呈し焼成は堅緻である。17は脚付小形カメの底部である。体部は大きく内接する弧状を示し脚部は大きく外側に外反する。体部は内外部ともナデで仕上げ脚部には外面ヨコナデ内面にはヨコハケを施す。精良な粘土を使用した淡赤褐色の土器であるが焼成は甘く軟質である。

18, 19は器台である。18は受部片であり受部は傾斜する平端部をもつ。受部の外方への突出は一端のみであろう。受部中央には小孔がのぞく。胎土には小砂粒が多く（暗褐色を示す）焼成は良い。19は小形鼓形器台である。受部は欠失している。受部と脚部との境の突出部はすでに消失しわずかの隆起としてその痕跡をとどめているのみである。外面の調整はヨコナデを施した後暗文状にヨコ方向のヘラ研磨が等間隔にめぐっている。脚部内面にはケズリが不定方向に行なわれており脚部付近のみヨコケズリで仕上げている。受部はヨコ方向のケズリの後ヨコナデで仕上げる。胎土に白色砂粒、金雲母を多く含む暗灰褐色の精製土器で焼成は堅緻である。

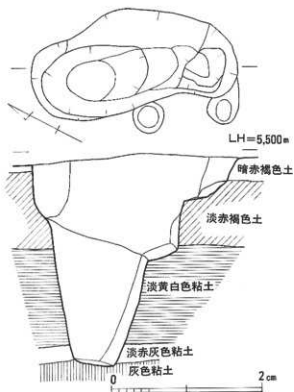
1, 7, 8, 10, 15, 18は下層から、その他は中層からの出土である。

#### S E02井戸（第19回 図版10a）

調査区西側の中央区北寄りに位置する井戸で、S E01同様検出面においては東西85cm、南北110cmの隅丸長方形状を呈し、主軸はほぼ南北を示している。下すばりに掘り抜かれているが



第19図 SE02井戸実測図(1/25)



第20図 SE03井戸実測図(1/25)

若干蛇行しており、底面上25cm程で急に径が狭まり不整形形の底面に至る。現地表からの深さは、最深部で168cmを計りSE01とほぼ同レベルを示す。湧水は灰色粘土層と淡赤灰色粘土との

境から主に流出していたものと考えられる。埋土の出土須恵器等から、奈良時代後半期の遺構であろう。

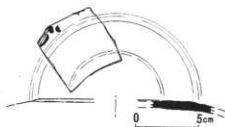
#### 出土遺物(第21図 図版13・9)

本井戸より出土した土器は、須恵器、土師器である。いずれも細片で実測するためにはいたなかったが、下層より墨書を残す須恵器杯蓋片が出土しているため報告しておく。杯蓋は5.1×4.8cmの方形に割れた天井部片で全体の1/8ほどの残存状態である。図上左側面は加工された形跡があり平端面となっている。天井中心より外縁5cmまではヘラケズリの後ナデ消されておりよれより外側にはヨコナデ、内面には不定方向のナデがみられる。墨書は天井部外縁に平行してタテ方向に書かれていると思われるが残存部が少く判別できなかった。

土器以外に、埋土より枝木等の自然遺物も出土している。

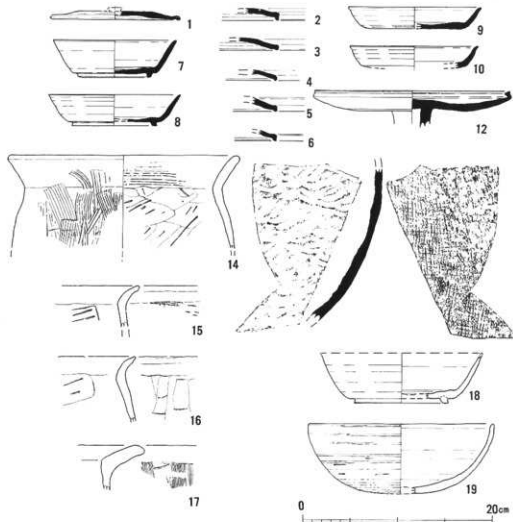
SE03井戸 (第20図 図版10b)

本井戸は調査区東南隅に検出されたものである。N-27°-Wに主軸をもつ不整な長階段形状を呈しており主軸長137cm、主軸に直交する最大幅70cmを計る。主軸南方から北側井戸底面に向かって高さ30cm程の階段状のケズり出しの段を有す。段最部からは下すばりの筒状の掘り方をなしており主軸に沿った楕円



第21図 SE02井戸出土土器実測図(1/2)

形の底面長は25cmを測る。現地表からの底面までの深さは140cm、段最下部からでは69cmを計る。井戸北壁には若干オーバーハングがみられる。前者とは井戸壁の土層が異なり淡赤褐土、淡黄



第22図 SE03井戸出土土器実測図(1/4)



白粘土の堆積が厚く、最下層に薄く淡赤灰色粘土、灰色粘土層が堆積しているのみであった。

埋土は大きく5層に分けられ、上から2層（現地表下25cm）を上層、その下2層（同50cm）を中層、5層目を下層として遺物を取りあげたが、遺物は中層に多く含まれていた。上層には赤褐色土をブロック状に含み人為的に埋め戻された形跡を持ち、4層下層に酸化鉄分の沈殿がみられた。井戸の埋没時期は奈良時代前半期を下限とする。

#### 出土遺物（第22図、第23図、図版14・1～3）

##### 須臾器（第22図、1～13）

1～6は杯壺片である。いずれも扁平な形態を有していると考えられ口縁の形態差により大きく三類に分類でき、おのおの1、2、4を代表例とする。1は外面中心より3.8cmまでへら切りを行った後ナデつけている。それより周縁部に向けては回転ヨコナデがみられる。内面は中心より2.6cmまでは不定方向のナデ、4.6cmまで断続的ヨコナデ、それより外縁までには回転ヨコナデがみられる。3も同様の形態をますが、1に比べ天井部の屈曲が直線的である。いずれも胎土が精緻で、淡青灰色を呈し、焼成は良い。2は口縁部が外反ぎみに立ちあがり、口唇部は内傾する丸みをもった平面面をもっている。外面の天井屈曲部より内方に向かってへら削りがみられる他は内外面ともヨコナデ調整を行っている。胎土は精良で青灰色をなし焼成は良い。5、6も同様の形態をなすがいずれも天井部が高めである。5は濃灰白色、6は淡灰黒色をなし、いずれも焼成は良いが5は若干軟質な仕上がりでである。4は口縁部が丸く下方へ屈曲するのみである。内面および外面の縁から1.0cmまでは回転ヨコナデ、それより上方は未調整である。胎土には白色砂粒を多く含み暗灰白色を呈す。焼成は軟質な仕上がりととなっている。

7～10は杯身である。7、8は高台を付けるもの、9、10は高台を付けないものである。7は口径13cm、器高3.9cm、8は口径14cm、器高3.3cmを計り、外底部はへら切り後ナデつけ、体部は内外面ともヨコナデを行い、内底部には、7は不定方向ナデ、8は断続的ヨコナデ調整を行っている。高台は底部の若干内側に断面方形状に付設しているが、8はやや外側に張り出す。7は外底部に板目状圧痕を残す。7は白色少砂粒を含むがいずれも精緻な粘土であり、淡灰黒色を呈す。焼成も良い。9は口径14cm、器高2.3cm、10は口径13.6cmを計る。口縁部は若干外反しており、器厚は厚手である。ともに外底部はへら切り後ナデつけており、体部内外面はヨコナデ、9は内底部の中心より1.5cmまで不定方向のナデがみられる。9のろくろの回転方向は時計まわり。いずれも大粒の白色砂粒を含む粘土で淡青灰色を呈し焼成は良い。

12は高杯杯部である。口径20.4cmを計り扁平な底部から内傾する体部へ移り、口縁部は外方へ小さく突出する。底部中位が下がりがみなのは焼けひずみのためであろう。脚部との接合は脚筒部上面で行なわれている。外底部は中心より7.0cmまで反時計まわりのへらケズリを、その外縁部にはヨコナデ、内面は中心より3.2cmまで不定方向ナデ7.3cmまでは断続的回転ヨコナデ、それより外方へは連続回転ヨコナデが施されている。内面には径14.4cmの重ね焼痕跡がみられる。

胎土は精良で青灰色を呈し（重ね焼痕跡は灰白色をなす）焼成は良く瓦質である。

13は大形のカメラ胴部片である。外面は格子目タタキ、内面は同心円文状のタタキが残る。外面は器表面の剥落が著しい。胎土は良質で色調は淡赤銅色をなす。焼成は軟質な焼きあがりとなっている。

#### 土師器（第22図14～19）

14～17は甕口縁片で内径を復元できるのは14のみであった。ともに胴外面は粗い上方向へのタテハケ内面にはヘラケズリが施されており口縁部はヨコナデで仕上げられている。14は口径23.8cm、口縁内面にヨコハケの痕跡を残す。胎土に白色砂粒を多く含む桃褐色で焼成も良い。

18は杯身である。復元した口径は17cm程度で大形である。内外面ともヨコナデ調整で底部のやや内側に断面分形の若干外へ張る高台を付ける。胎土は精良で明褐色をなし、焼成は良い。19は碗である。復元口径19.4cm。外面口縁下3.2cmより底部まで丁寧な

回転ヘラ削り、その他内外面とも回転ヨコナデがみられる。外面には間隔をあけた5条の回転研磨痕がみられた。胎土は白色砂粒を含む粗い粘土で、色調は赤褐色をなし、焼成は良い。

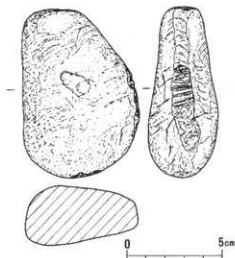
#### 石器（第23図）

井戸中層より出土した。図左側面をのぞく三方に擦痕がみられ、特に右側面の磨滅は著しく6条の深い凹線が刻み込まれていた。スリ石として使用されたものであろうか。長さ9.0cm、幅6.1cm、厚さ3.7cmを計る。

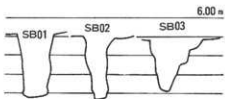
#### 小 結

当調査区で検出した三基の井戸は時期を異にしているとはいえ、その底面レベルはいずれも似かよった数値を示しており、当地における湧水層が長年安定して充分な水を供給していたことが窺われる。

井戸一基が水を供給した戸数については、調査面積が限定されており明らかにはし難いが、井戸の機能上さほど遠くない地点に掘り抜かれていたことは容易に推測が付き、建物の立地上の制約を考えれば、SE02にSB04が、SE03にSB06が対応して使用された事は充分に考えられる。今後当地における井戸については、その立地と住居との関係について検討してゆく必要がある。



第23図 SE03井戸出土石器実測図(1/2)



第24図 井戸底面到達レベル(1/100)

#### 4. 土 墳

調査区により検出された土墳は計4基である。いずれも調査区東側に位置し、SK01をのぞくと南側面寄りに偏している。個々の土墳の機能については下明であり今後の検討が必要であろう。

以下、個々の遺構および出土遺物について説解を加えてゆく。

##### SK01土墳 (第10図, 図版11a)

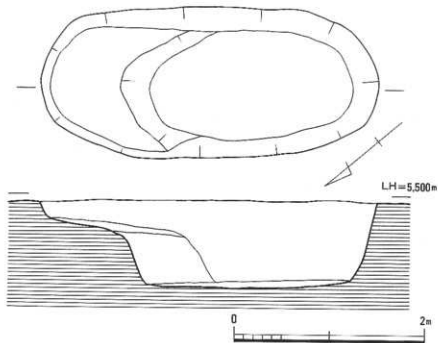
調査区中心より北東部へ持って検出された土墳で淡赤褐色土まで掘り込まれている。

主軸をN-40°-Wにとる。平面プランは整った長楕円形を呈し、主軸長179cm, 最大幅80cmを計る。墳は2段に掘り込まれており一段めは北東部にテラス状にケズリ出されている。テラスの最段部は地表下20cmである。2段めは長楕円形状をなし下すばまりに掘り込まれている。底面は主軸長108cm, 最大幅58cm, 深さ46cmを計り、フラットな面に仕上げている。埋土には炭化物を多く含み、それとともに多量の土器小片を含んでいたが、いずれも細片であり図化できるものは少量であった。

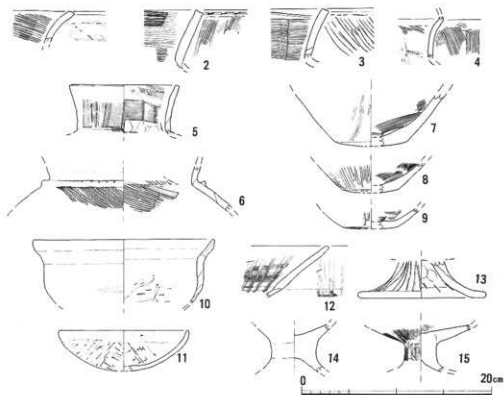
時期は弥生時代後期末までにおさまるものである。

##### 出土土器 (第26図, 図版14・4)

1~7は壺である。1・2・3・4はいずれも小片であった径を復元するまでにはいたらなかった1は中形広口壺の口縁片で端部は大きく外反し口厚部は平面面をなす内外面とも左上方



第25図 SK01土墳実測図 (1/20)



第26図 SK01土坑出土土器実測図(1/4)

へのナナメハケを施し外面はその後ヨコナデを用いてナデ消している。胎土には白色、白色透明砂粒を多く含む淡橙褐色を示す。焼成は良い。2は大形壺の口縁片であろう。口唇部は凹みをもつ平端面を有し、胴部から屈曲した外反ぎみの口頸部へと至る。口唇部外側にナナメ上方からの刻み目を入れる。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施しいずれも粗く深い。胎土は白色透明砂粒を多く含む。色調は淡赤褐色を呈し焼成も良好である。3も、2同様の口頸部の形態を示すが、口唇部はより平端面をなしており、外面のハケ調整は櫛目間隔が広い一方、内面のヨコハケは間隔が狭くかつハケの原体幅は4.2cmと広い。胎土は若干の白色小砂粒を含むがおおむね精良である。色は暗赤褐色を呈す、焼成は良いがやや軟質である。4は中形複合口縁壺の頸部片である。胴部から立ち上がった後ゆるやかに外反しながら屈曲部に至り、明瞭は稜をもって内湾する。外面はタテハケ、内面はハケ調整を行っているが接合部口縁部にはヨコナデを用いている。胎土は白色透明砂粒を含む粗い粘土を用いており暗茶褐色である。焼成も良い。5は中形直口壺の口縁である。胴部より直交する頸部中位より若干外反し、丸みを有す平端面をなす口唇部に至る。器面の調整は外面を頸下部から上方へタテハケ、内面は断続的ヨコハケを基調としており、胴部との接合部には指押痕がみられる。胎土は白色透明

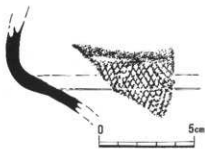
砂粒を含む良質の粘土を使用しており明赤褐色を呈し、焼成も良好である。6は複合口縁窓の胴上半部と思われ、頸部の一部を残す。球形の胴部から大きく屈曲して外反する頸部へと続くものと思われる。頸部との接合部下に一条の貼り付け突帯を有す。突帯頂部には刻み目を施している。胴外面には左斜め上方へのハケ、内面にも同様なハケが観察される。頸部にも同様なハケ調整を行っているがナデ消しが試みられている。胎土中には白色、白色透明砂粒、金雲母片が含まれているおおむね良質で明褐色を呈し、焼成も良い。

7, 8, 9は底部片である。いずれも丸底がかった平底で、7を除いて外底部にはハケ調整がみられる。7の外面にタテ研磨痕がみられる他はともに内外面ともハケ調整を施す。7は白色、白色透明、黒色砂粒を多く含む明桃褐色を呈す。8は白色透明砂粒を含む暗茶褐色、9は精良な粘土を用いた淡茶褐色でいずれも焼成は良い。底径は順に7.5cm, 5.8cm, 6.9cmで、形態、その他の状況から7, 9は壺、8は甕底部であろう。

10, 11は浅鉢である。10は復元口径19cmを計り、内湾ぎみに開く口縁から体部は垂下し下半部が内側に大きく屈曲して底部に向かう。口唇部は丸くおさめる。内外面とも体上半部はヨコナデを施しているが、内面下部はヨコ方向のヘラケズリを行い器壁を薄く仕上げしており、外面にはヨコ方向の研磨が施されている。胎土には大粒の白色砂粒が混じる粗い粘土が使用されており、色調は暗茶褐色で焼成は良い。11は口径を13.6cmに復元できる。口唇部は丸くおさまっており口縁部下には強いヨコナデを加え、底部はやや厚手である。体外面は口縁に沿った規則的なヘラケズリにより、内面はヨコハケによって整形されている。胎土は白色透明砂粒を含む粗い粘土で明褐色に焼きあがっており焼成は良い。

12は高杯杯部片である。杯底部から大きく外反する口縁部の先端には角のとれた小さな面をつくる。内面は精緻なヨコハケの上に3条~4条のヘラ研磨を基本単位とする暗文がめぐっている。外面も同様にナナメ上方へのハケの上から、1本ずつのヘラ描暗文が施されている。胎土には金雲母小片が多く含まれており良質である。色は明褐色で焼成も良いが軟質である。

13, 14, 15は脚台付土器である。いずれも脚部片のみである。13は裾部に向けて大きく広がり脚部は丸くおさめる。器厚は厚手で外面はナデ調整の上からタテ方向のヘラ研磨の暗文をめぐらす。内面上部には指押痕がみられ下半部にはハケ状工具による粘土かき取り痕がみられる。白色、白色透明砂粒を多く含む淡褐色の土器で焼成は良い。14は台付小形甕の脚部であろう。内外面ともナデ調整がみられる。白色砂粒を多く含む明褐色を呈しており焼成は良い。15は大きく外へ開く脚部から短い脚筒部へ続き大きく開く胴部に接続する。外面は細かいタテ方向のハケ調整、胴内部にも放射状にハケが施されているが、



第27図 SK01土壇出土陶質土器実測図(1/2)

胴最下部および脚内面には指押痕、ナデつけがみられる。

第27図は陶質土器片である。短頸壺の胴上部から頸部にかけての破片であるが小片のため径の復元はかなわなかった。胴部から頸部への移行はなだらかである。胴上部外面には斜格子のタタキが施されておりそれを切って一条の沈線がめぐる。内面はきれいにナデ消されており調整は丁寧である。胎土には白色、白色透明

砂粒が多く含まれ、色は内外面が淡灰色、断面は淡赤灰色である。焼成は軟質である。

#### S K02土壌

調査区西南隅に掘られた土壌でS K05を切って掘り込まれている。主軸はN-2°-Eを向き全長180cm、幅104cmの不整形円形をなし深さは7cmと浅い。中心に浅い柱穴が掘り込まれていた。奈良時代の遺構である。

#### 出土遺物

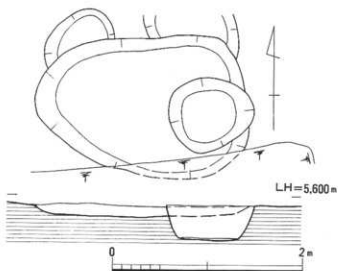
埋土中より須恵器杯蓋、土師器片が出土したが小片のため実測には至らなかった。

#### S K03土壌

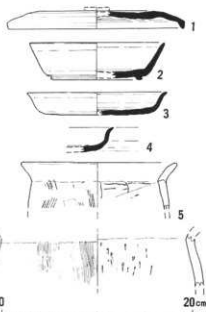
調査区西南部で、S K02の東側にS K05を切って掘り込まれている。主軸をN-87°-Wにとる楕円形の土壌で、深さ6cmと浅い。埋土状は炭化物が多く含まれており、中から、須恵器、土師器片が出土した。時期は奈良時代後半までにおさえられよう。

#### 出土土器 (第29図、図版)

1~4は須恵器である。1は杯あるいは盤の蓋であろう。復元口径は、18.4cmを計る。口縁部は小さく下方へ屈曲し口唇部は鈍く尖る。器高は低く若干焼けひびんでいる。外面天井部は中心部か



第28図 S K03土壌実測図(1/20)



第29図 S K03土壌出土土器実測図(1/4)

ら7.3cmまで回転ヘラケズリが行われており内面は2.8cmまで不定方向のナデが行われているが、それより外縁では回転ヨコナデで仕上げられている。ろくろの回転方向は反時計まわり。内外面とも重ね焼きの痕跡がみられる。胎土は精良で淡灰色を呈し重ね焼き部分は淡赤灰色を呈す。焼成は甘く軟質である。

2～4は杯身である。2は復元口径14.0cm、器高3.9cmを計る。高台は扁平で底部内側に付けられており、体部は上外方へ直線的に伸びる。外底部はヘラ切り後丁寧なナデつけが行われており内底部は不定方向のナデで仕上げる他は回転ヨコナデで施す。胎土には白色小砂粒を含み、淡青灰色で焼成は良好である。2、3は高台を持たない盤状を呈す。2の復元口径は14.6cm、器高2.4cmを計り、ともに口縁部は如意状の外反を示す。外底部はヘラ切り後未調整でその他は内外面とも回転ヨコナデを施している。胎土は2かやや大きめの砂粒を含むがおおむね良質で、青灰色を呈し焼成も良い。

5、6は土師器である。5は復元口径16cm直線的に立ち上がる胴部は上端部に向けてくの字形に鋭く屈曲する。外面は粗いたてハケ、内面はヨコ方向のケズリがみられる。白色砂粒を多く含む粘土を使用しており器表は淡紫褐色を呈す。焼成は良い。6は胴部上半部のみである。胴部は若干ふくらみを有しており口縁の屈曲も5ほど急ではない。外面は細いたてハケ、内面はたてハケのみで仕上げる。胎土には白色、白色透明の大粒の砂粒を多く混じえているが良質であり、焼成も硬い。

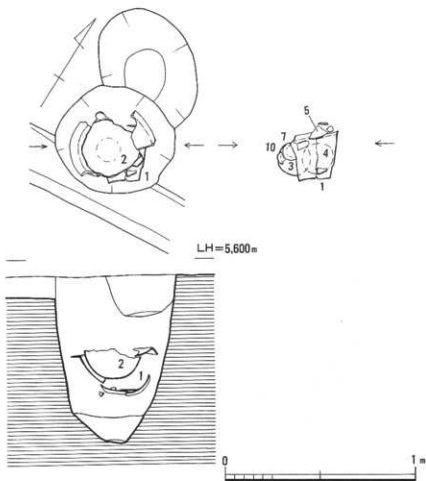
#### S K04土壙（第30図、図版11b、12a、b）

調査区南西部で、排水用に掘った溝に南半部を削りとられて検出した。北方の楕円形柱穴を切って掘り込まれており平面プランは円形をなす下すばまりの壙である。現存径は55cm～65cmで、現地表下74cmまではゆるやかにすばまりそれより下方では急激に内傾し底径11cmまで縮まる。最深部レベルは512cmを呈す。埋土は赤褐色ブロック土を混入した暗茶褐色土であり、短期間に人為的な埋戻しが行なわれたことがうかがわれる。また炭化物を多く含んだ炭化した植物繊維痕もみられた。土壙中位からは、以下図説明を加える土器が一括埋没されて出土した。埋没時期は奈良時代後半期でおさえられよう。

#### 出土土器（第31図、図版14・5～11）

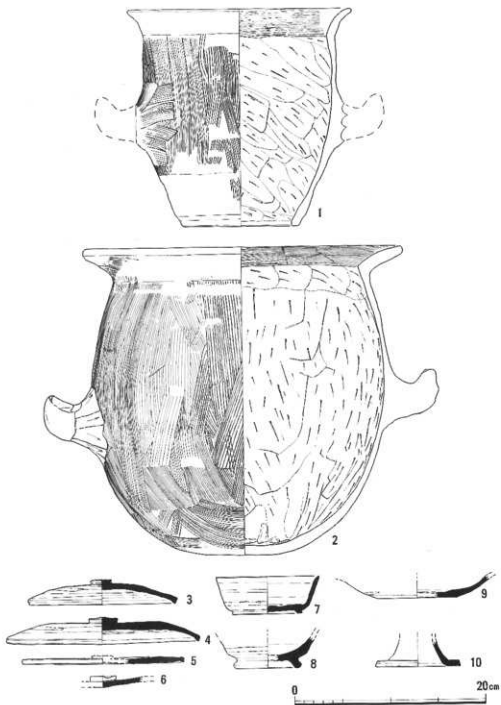
1、2は甕と甕で、出土状況からみて同時期に使用された可能性を有す。1は復元口径23.2cm、底径15.2cm、器高23cmで把手部は欠失している。口縁部は如意状に外反し胴部は把手接合部を最大径として若干ふくらみを持つ。底部は若干すばまり肥厚する。底部上4.8cmに明瞭な段を有す。成形には3段階+αを要していることが内面のケズリ方向、胎土の砂粒密度差等により推測されるが外面の調整はたてハケを基調とし一気に整形されており、口縁部および胴下部はヨコナデで仕上げる。2はほぼ完形に復元できた。口径32.8cm、胴部最大径31.0cm、器高32.6cmを計る。外面はたてハケ調整、内面は上方への断続的ケズリを行っている。ケズリは

大きく4段階に分けて行なわれており、下底部から上方へ1cm, 9cm, 17cm, 25cmを基点としている。口縁部は大きく外反し内面はヨコハケ、外面はヨコナデ調整を仕上げとする。把手は手捏ねで成形付設されている。1, 2とも底部付近は磨滅, 剥落が著しい。1, 2ともに大粒白色透明砂粒を多く含む粗い粘土を用いており, 淡茶褐色を呈す。3の胴下部には明瞭な炭素な付着がみられ2次調整を受けている。焼成は良い。3~6は杯蓋である。3, 4, 7は完形で出土した。3は口径15.4cm, 器高2.6cm, 天井部はなだらかな弧状をなし, 扁平なつまみを付設する。口縁部は断面三角形形状を呈し鈍く突出する。胎土は精良で濃灰白色を呈し焼成は良い。4は, 3の大形品であり口径20.3cm, 器高2.95cmを計る。3に比して天井部上面が平端面をなす。つまみは3に比して基部のしまりは甘い。胎土は良質で濃灰白色をなし焼成は良い。5は扁平な蓋で径17.1cmを計る。外面へラ削りは中心より6.3cmまで行なわれており後に簡単なナ



第30図 SK04土坑実測図(1/20)





第 31 图 SK04 土城出土土器实测图 (1/4)

テつけを行っている。内面は中心より5.7cmまで不定方向のナデを施しておりそれより外縁は回転ヨコナデで仕上げを行っている。胎土は精良で濃灰白色をなし焼成も良い。6は天井つまみ部のみ出土である。

7, 8は杯身である。口径10.7cm, 器高4.0cm, 高台は底縁部に沿って付設され低く, 体部は立ち上がりか急で直線的に口縁部に至る。体外面下部に接合痕と思われる亀裂がめぐる。外底部はへら切り後ナデ仕上げ, 内底部には仕上げナデを施し体部は内外面ともヨコナデで仕上げる。8は, 高台の張りが大きく高いがシャープさにかける。高台の接合は粗雑である。

9は, 復元底径8.4cm程の盤である。底外面中心から5.7cmまでは反時計まわりのへらケズリが行なわれており, 内底面3.3cmまでは不定方向ナデ, その他はヨコナデを施す。胎土には白色砂粒が多く淡青灰色で焼成も良い。

10は高杯脚部で下開きの脚筒部が裾部では水平に広がり端部は鈍く下方へ尖がる。精緻な粘土を使用しており, 色調は灰黒色, 焼成は良い。

その他, 土師器裏片, 須恵器片等が出土しているが実測するまでには至らない。

#### S K05土壌

S K02とS K03に切られた円形土壌で, 径70.5cm, 深さ8cmを計る。土壌南隅に径26.5cmの小柱穴が掘り込まれていた。出土遺物はなかった。

#### S K06土壌

S K04土壌の北2mに掘り込まれた南北68.5cm, 東西41.5cmの不整楕円形の土壌で深さ15.5cmと浅い。S K04の南東柱穴を切っている。出土遺物はない。

## 5. その他の遺構

### (1) 櫛列

#### S A01櫛列

調査区内北東部から中央南端へ向けて設けられた直線的に伸びる柱穴列であり, 櫛列であると考えられる。現長15.5mで南西方向へ伸びてゆく可能性を有している。杭間隔は1.9cm~3.3cmで一定していない。杭列は柱穴6より若干南方向へ屈曲している。S A01越しに建てられた建物の痕跡がみられないこと, 調査区より東方は谷状地形を有しており調査区以東は, 居住空間としての可能性がうすい事と東側調査区を画すように伸びている事などから, 居住空間を他と隔すために設けられた櫛列であると考えられる。柱穴内より奈良時代須恵器片および土師器細片が出土している。

#### S A02櫛列

S A01北側に東西にならぶ柱穴列でS A01と共存する可能性をもつ櫛列である。杭間隔は

3.2m～3.3mと一定している。S B06と主軸を同じくしており、S B06と時期を同じくした櫓列であったものと考えられる。

#### S A03櫓列

S A02櫓列に直交する方向に南北にならぶ櫓列でS A02同様柱間を3.3m内外にとり、S B13と主軸をほぼ一つとする。柱穴3はS B06の柱穴3を切って掘り込まれている。S B13掘立柱建物に付設された櫓列であろう。

#### S A04櫓列

S A03に直交しS A02に並列する杭列で柱間を2.4m内外にとる。

#### S A05櫓列

S B07とS E03の間に挟まれたほぼ南北にならぶ櫓列である。

#### (2) 柱穴群

本調査では他に多くの柱穴群が検出されているが時間的制約により精査するに至らなかった。埋土からの出土遺物は弥生～奈良時代の土器片が大半を占めており、平安時代以後の遺物と認識できるものはみられなかった。これからの柱穴の機能についての検証は今後の課題である。

## IV ま と め

当調査区において検出された遺構は弥生時代後期から奈良時代にかけての集落の一部であり、竪穴式住居、掘立柱建物、井戸、櫓列、土塼等の検出はいずれも当地が居住空間として常用されていたことを明確にした。

竪穴式住居は、その分布状況、出土土器の検数から、同時期に併存したのは1ないし2棟で、それらは移動、拡張をくり返し、継続的に生活が営まれたことを想定させ、また古墳時代前期の井戸からは完形の甕形土器を含む良好な土器のセットを確認することができた。同様に奈良時代の掘立柱建物でも併存したのはせいぜい2棟程であり、建物の主軸方向の変化および柱穴の切り合いから、少くとも3度におたる建物配置の転換が行われていたことが推定される。建物群に伴うとみられる井戸、土塼等からは良好な土器のセットを出土するに至った。S B0809については1間×1間の間取りをもつ小建物であり倉庫としての機能を想定することができ、S B09は、S B10と主軸を同じくすることから、S B09がS B10に伴う倉庫であったことが考えうる。

しかし、竪穴式住居、掘立柱建物はいずれも柱穴のみの検出であり、出土遺物は質量ともに限られたものであるため、時期についての細い考察はおこないがたい。今後その時期等を含めた詳細な検討は、将来にわたる課題として次回の報告で合わせて考えてみたい。

## 付 載

### 調査区南側南北用水路出土遺物について

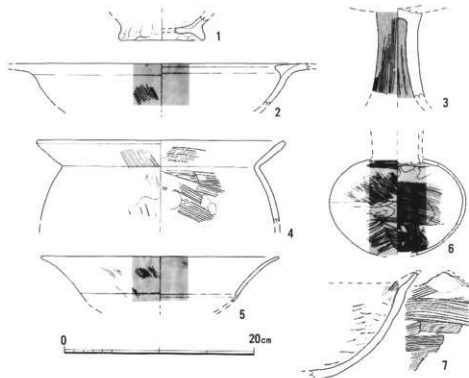
第5次調査と時を同じくして、調査区西側道路沿いに北流する農業用水路が新設されることになり、長さ30m、幅2m、深さ50cm程の掘削作業が行はわれた。幸いにも掘削は遺構面まで到達していなかったが、立会いの際、掘削排土内より少なからぬ土器片が出土したため、それらを採取した。土器は包含層からの出土のため小片のものが多かったが、縄文時代晩期から平安時代に到るものであった。

ここでは、出土土器のなかからその一部を紹介することによって、今後当地域周辺における文化財保護活動の一資料となることを期したい。

#### 出土遺物

1は長臼式の裏形土器である。内外面とも指押し成形痕が残る。胎土には白色砂粒が多く含まれており良質の粘土を使用しており、明褐色を呈し焼成も良い。

2は弥生時代中期、3～7は後期後葉の土器である。2は高杯で内外面とも丹塗りの痕跡が認められた。器表は磨耗が著しいが、外面にタテハケを施しているのが観察されている。胎土



第32図 用水路出土遺物実測図(1/4)

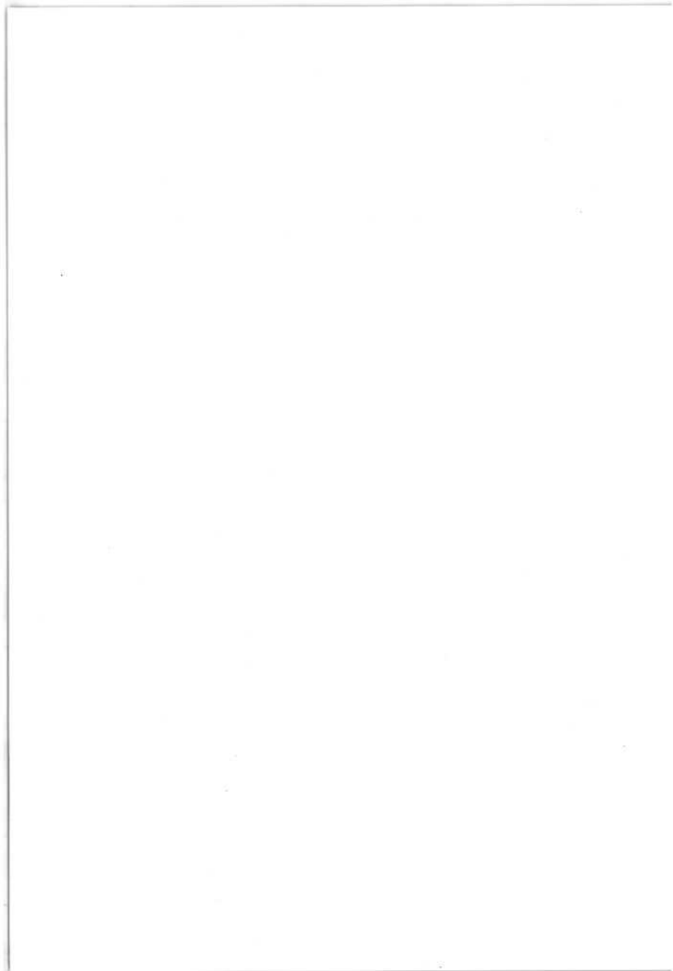
は粗く白色砂粒を多く含み暗褐色をなしており焼成は良い。3は脚部のみである。外面にはタテハケが施されており、内面はしばり痕がナデ消されている。赤褐色を呈しており、胎土は良質の粘土が用いられている。焼成はやや軟質の仕上がりとなっている。4は甕である。口縁は大きく外に開き胴部もやや張り出す。胴外面はヘラ状工具によるタテ方向のナデがみられ、内面には粗いヨコハケが施されている。胎土には白色砂粒が多く含まれた粗めの粘土が使用されており、淡灰褐色で焼成も良い。5は高杯で内外面とも丹が施されている。口縁部下は大きく外反している。詳細な調整は明らかではない。胎土には微砂を含むがおおむね良く、淡黄褐色であるが軟質な焼き上がりを見せる。6は長頸壺体部である。器壁が薄くやや扁平な球形をなす。外面は胴最上部と下部に細い研磨が施されており、胴中位は上半部にナメハケ、下半部にはヨコ方向のヘラケズリが残る。内面にはヨコハケ調整がみられ、最上部の頸部接合部下にのみ指押し痕が顕著に残る。7は細片ではあるが注口をひねり出した鉢である。外面は粗いヨコハケ、内面にはヘラケズリがみられる。6は精良な粘土を用いた淡黄褐色の土器で焼成も良く、内外面に丹が残る。7は胎土に大粒の砂粒を多く含んでおり、暗褐色を呈するが、焼成は良く堅い仕上がりを見せる。

その他図示した土器以外に弥生後期末の甕棺片、平安時代の土師器椀片等の出土もみている。

以上のように、用水路排水内から出土した土器は、第5次調査で確認した集落址が、周辺地域に確実な広がりを見せていることを裏付ける好資料であり、また周辺に縄文時代晩期の遺構等が埋没している新たな可能性を示した。

特に弥生時代後期の土器は図示しなかった例を含めかなりまとまったものである。また2、3、5、6に代表される丹塗土器、甕棺片等の確認は、将来この近辺において当該時期の墓地が発見される可能性を示している。

# 図 版





a. 調査地点全景（西から）



b. 調査地点全景（東から）



図版 2



a. 西側調査区近景 (北から)



b. 中央調査区近景 (北から)



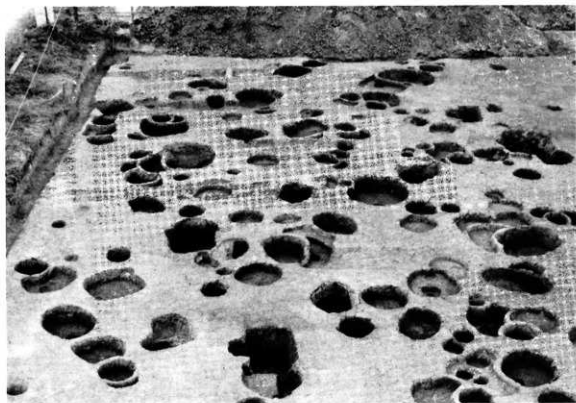
a. 竪穴式住居の切り合い ①



b. 竪穴式住居の切り合い ②



a. S B01, 10, 11掘立柱建物の切り合い



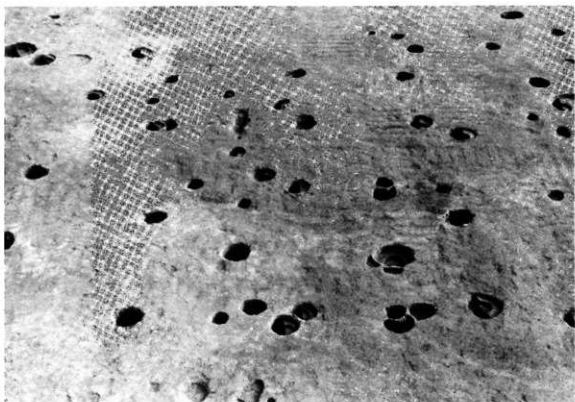
b. S B01掘立柱建物近景



a. SB02 掘立柱建物



b. SB03 掘立柱建物



a. S B 06 掘立柱建物



b. S B 06 掘立柱建物と S A 01, 02 柵列の配置



a. SB08掘立柱建物



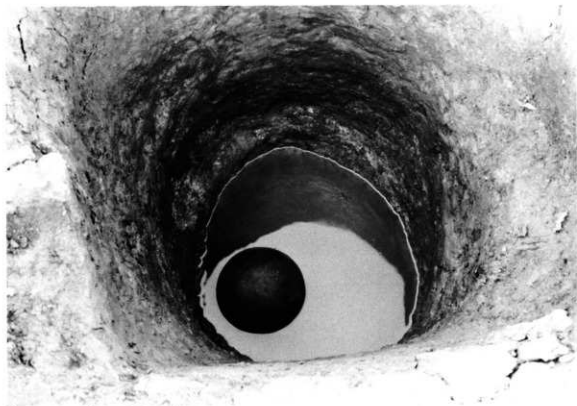
b. SB09掘立柱建物



a. S B02, 03, 07独立柱建物とS A01棚列の配置



b. S B04, 05, 08独立柱建物の切り合い

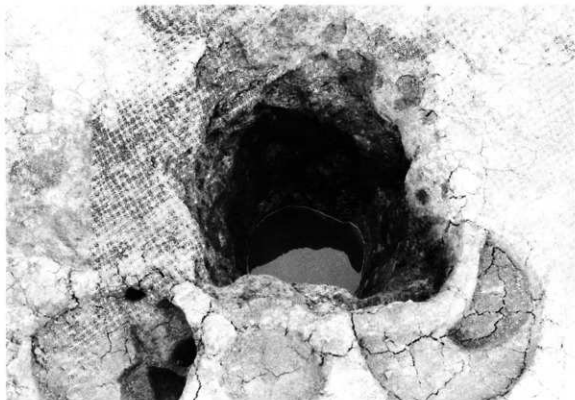


a. S E01井戸と出土した完形甕



b. 完掘後のS E01井戸





a. S E02 井戸



b. S E03 井戸

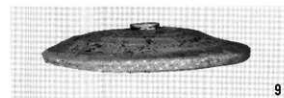
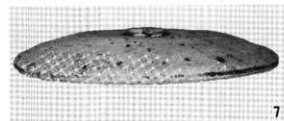


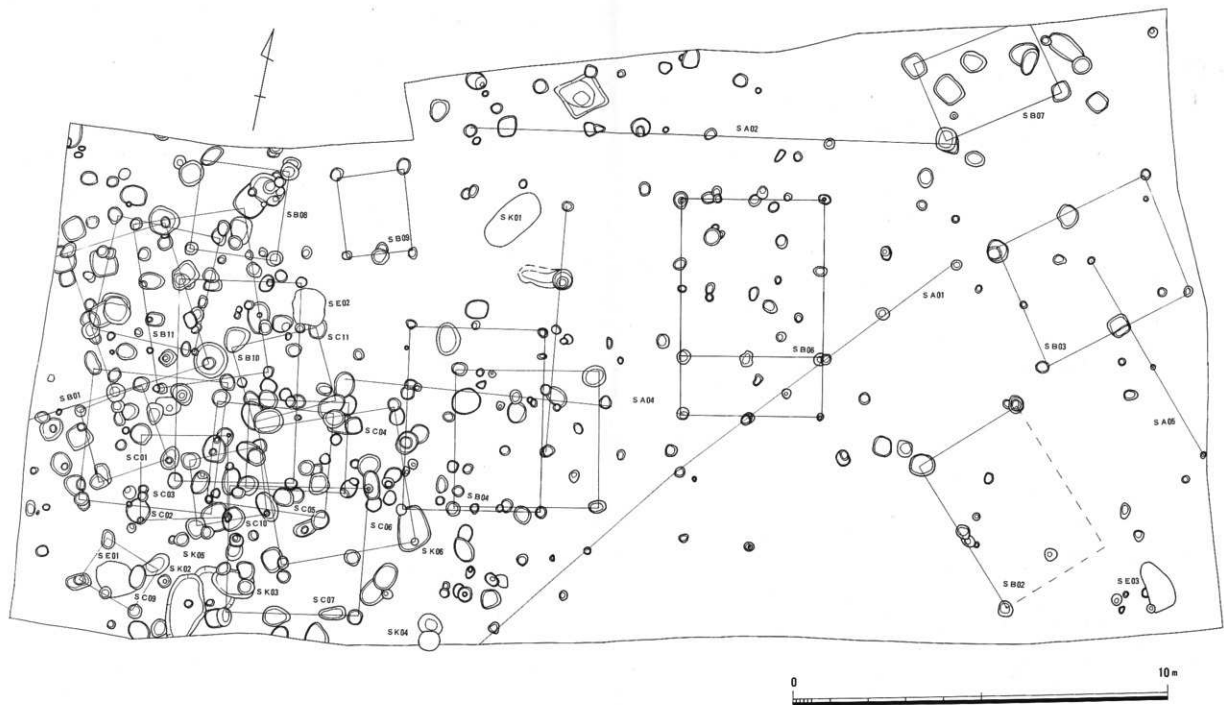
a. S K01 土壤



b. S K04 土壤







志登遺跡群第4次調査地点全体図(1/100)

# 志登遺跡群

前原町文化財調査報告書  
第 18 集

昭和 60 年 3 月 30 日 発行

発 行 前 原 町 教 育 委 員 会  
福岡県糸島郡前原町大字前原 623

印 刷 赤 坂 印 刷 株 式 会 社  
福岡市中央区大手門 1 丁目 8 番 34 号